

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月31日現在

機関番号：32615

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2012

課題番号：21520726

研究課題名（和文）19世紀中葉の中国長江流域における社会変容と太平天国

研究課題名（英文）The Taiping Rebellion and Social Change of Yang-zi-jiang River Basin in China in the 19th Century.

研究代表者

菊池 秀明（KIKUCHI HIDEAKI）

国際基督教大学・教養学部・教授

研究者番号：20257588

研究成果の概要（和文）：19世紀の中国長江流域における社会変化を、太平天国とそれに対抗した湘軍＝曾国藩の創設した地方武装勢力の主張や政策を中心に検討した。太平天国は福音主義運動の「文明化の使命」という理念に影響を受け、中国の伝統文化に対する激しい攻撃を行った。だが彼らの攻撃的な行動は「中庸」を重んじる中国知識人の受け入れるところとならず、漢人エリートたちは満洲人貴族との間に深刻な対立があったにもかかわらず、太平天国に反対した。

研究成果の概要（英文）：This study analyzed social changes in the Chang Jiang basin of China in the nineteenth century, focusing on the claims and policies of Taiping army and their adversary, the Xiang army led by Zeng Guofan. The Taiping movement was influenced by Christian evangelical revivalism and undertook a "civilizing mission" which led it to attack Chinese traditional culture. Chinese intellectuals respecting "moderation" could not accept the aggressive thought and actions of the Taiping leaders, causing local Chinese elites to oppose the Taiping even though they had serious reservations with the Manchu-led Qing government.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：中国近現代史

1. 研究開始当初の背景

本研究は19世紀中葉の中国における社会変容について、太平天国運動（1851～1864年）の主要な活動地域であった長江（揚子江）中・下流域を舞台に、宗教と民族、税制改革をキーワードとして分析を進めた。

従来太平天国の地域社会への影響に関する研究は、1860年以後の長江下流域を取り

あげることが多かった。しかし当時の太平天国は没落過程にあり、軍事的な劣勢や軍紀の悪化によって積極的な地域経営を行う条件を欠いていた。

そこで本研究は1852～60年の長江中流域の事例を扱うことにより、太平天国、清朝双方の地域経営を長期にわたって分析し、当時顕在化していた社会、民族矛盾とその対応策、

引き起こされた社会変容をトータルに把握することをめざした。

また筆者はかつて中国近代史を「革命か、改革かに関わりなく、中国史上初めて南方から変革が行われた時代」と捉え、その最初の事例として太平天国を位置づけた。本研究はこの仮説を検証する場であり、運動が長江流域を舞台に展開した意義を同地域の社会変容という視点から解明しようと試みた。

2. 研究の目的

本研究は①太平天国の占領地経営と宗教政策、②太平天国に呼応した反乱勢力の行動とその要求、③清朝支配地域における満洲人、漢人の関係、④清朝が実施した税制改革とその効果について検討した。

また地域社会史の視点から見た場合、長江中流域は抗糧（租税不払い）や漕米（税の一種）の減免をめぐる紛争が多発した地域であった。本研究は太平天国が提起した宗教政策、郷官設置などの地方統治やこれに呼応した反乱勢力の活動を分析し、この地域の下層民が太平天国に寄せた期待と実態を分析した。また清軍内の満洲人、漢人官僚の対立を手がかりに、当時の民族関係を検討した。

さらに清朝が反攻に転じると、総督官文（満洲族）と巡撫胡林翼（漢族）は漕米の負担軽減を主内容とする税制改革を実行した。清朝がどのように民族対立を乗り越え、支配地民衆の支持を取りつけていったか、地方エリートの文集を手がかりに明らかにした。

3. 研究の方法

史料としては申請者が台湾で収集した第一次史料である檔案（日本の公文書に相当）を活用し、これに中国、イギリスおよび日本国内に所蔵されている地方志や個人文集、英文史料などを組み合わせた。これらの分析によって、近代初めに中国が経験した社会変容を地域間の差異に注目しながら理解し、清末の近代化過程における地方自立の動きを解明することが期待された。

4. 研究成果

各年度の研究成果は以下の通りである。

【平成 21 年度】

太平天国が揚子江中流域へ進出する過程で行った軍事行動と宗教、経済政策、地域社会の反応について湖南、湖北、安徽、江西、南京の各地を例として検討した。

まず 1852 年に太平軍が広西桂林攻撃に失敗し、湖南へ入った過程を検討した。途中全州で住民虐殺が行われたという通説があるが、実際に殺されたのは守備隊の兵士と清朝官員であったこと、住民虐殺のフィクションが生まれたのは、強い宗教性を帯びた太平軍の不寛容な態度に驚いた人々が、「王を殺さ

れた報復に住民を虐殺した」という解釈を与えたことを明らかにした。

続いて太平軍が長沙から揚子江流域へ進出し、武昌を占領した過程を分析した。長沙の戦いで清軍は地雷攻撃を防いだが、そのノウハウは武昌へは伝わらず、圧倒的な兵力差もあって清軍が城内に籠城したために、トンネル工事を阻む手段を持たずに敗北したことを指摘した。

さらに武昌では都市住民に対する厳しい統制が行われたことを指摘した。それは現代も中国社会が抱えている「城郷区別（都市と農村の格差）」の現れであり、辺境の移民出身だった太平軍將兵の都市住民に対する態度には、繁栄を独占してきた都市に対する怨嗟が現れていることを検討した。

最後に太平軍の南京攻略について検討した。その兵力は十数万で、清軍の守備隊は地雷攻撃で陣形を乱して敗北した。この時八旗兵 4000 名とその家族は激しく抵抗し、南京陥落後に満洲人女性に対する虐殺が行われた。それもまた太平天国が抱えていた宗教的な不寛容の結果であった。

【平成 22 年度】

当年度は太平天国の西征史について分析を進めた。この作戦の目的は食糧補給ルート確保にあり、北伐を支援する意図がこめられていた。また南昌攻撃は楚勇の抵抗で成功せず、各地の呼応勢力と連携することが出来なかったことを明らかにした。

次に 1853 年後半の湖北進出と安徽廬州攻撃について考察した。安徽では翼王石達開が地域経営に着手し、徴税や科挙が実施された。また太平軍が湖北へ進出したが、間もなく廬州を攻撃した。清朝は江忠源を廬州救援に向かわせたが、太平軍は廬州を占領して江忠源は戦死した。

この頃武昌では湖北巡撫崇綸（満洲人）と湖広総督吳文鎔（漢人）の対立が表面化し、崇綸は吳文鎔を告発して、彼を黃州で敗死に追い込んだ。吳文鎔は曾國藩率いる湘軍の編制完了を待っており、曾國藩は崇綸を激しく批判した。この内紛は清朝内に満洲人と漢人官僚間の矛盾が存在していたことを示しており、同様の対立は欽差大臣勝保（満洲人）と山東巡撫張亮基（漢人）の間でも見られた。

だが今回の調査によって、当時は満洲人官僚の間でも深刻な対立が見られ、その関係は中央の動向も含めて複雑な様相を帯びていたことが明らかになった。北伐軍対策をめぐって対立した勝保と欽差参贊大臣僧格林沁（満洲貴族）はその例であり、江南提督和春も陝甘総督舒倫保（共に満洲人）を告発した。

太平天国は客家正統論をベースに強烈な漢人中心主義を唱えたが、彼らは清朝官吏を容赦なく殺害し、その投降を認めることで清朝内部の様々な矛盾を有効に活用すること

が出来なかった。これに対して清朝は北伐軍兵士の投降を認め、彼らに「義兵」を結成させて太平軍鎮圧に活用するなど、柔軟な姿勢を見せていたことが確認された。

【平成23年度】

太平天国の北伐史の最終部分と、西征後半の歴史について分析を行った。

北伐史に関しては、1854年1月に天津郊外を離れた太平軍が壊滅するまでの過程を考察した。従来北伐軍は華北の厳しい冬に敗れたと言われてきたが、実際には凍傷をかかえた将兵が雪融けの泥に動きを奪われ、追撃してきた僧格林沁の軍に殺されたことを明らかにした。また援軍は兵力不足のために出発が1854年2月にずれこみ、新兵が多かったため、途中加わった反政府勢力を統率できなかった。このため山東臨清占領後に勝保率いる清軍の反撃を受けると、援軍は敗北して北伐軍は敵中深く孤立した。

北伐軍は林鳳祥率いる連鎮の本隊と、李開芳が率いる高唐州の別働隊にわかれて抵抗を続けたが、僧格林沁の水攻めによって苦境に陥った。連鎮で食糧が枯渇すると、広西人幹部が特権的な地位を占めることへの反発が湖南、湖北人将兵の間で強まり、多くが脱走を図った。僧格林沁はこれを見逃さず、投降兵を「義勇」に組織して北伐軍攻撃の矢面に立たせた。彼らは大きな戦果をあげ、北伐軍を壊滅に追い込んだが、それは清軍にどのように太平軍と戦うべきかを認識させた。

いっぽう西征史については、1854年に曾國藩が湘軍を編制し、太平軍との戦いを開始する過程を分析した。彼は腐敗した八旗、緑營に代えて、下層知識人の師弟関係および湖南の地域結合をベースとした結束力の強い軍隊を組織したが、その編成のあり方は太平軍のそれを多くの部分で受け継ぐものだった。この同郷結合をベースとするパーソナルな組織原理は、その後の中国近代史における社会結合に大きな影響を与えるものだった。太平軍と湘軍は地方の軍事化が進んだ近代中国社会のひな形となった。

【平成24年度】

当年度は天京事変によって太平天国が劣勢となった1856年から1864年までの湘軍の反攻と対外関係について、長江中流域および下流域を中心に検討した。

まず長江中流域における清朝の反攻については、胡林翼の文集および王家璧や曾國藩、毛鴻賓の書信を活用して湘軍の軍事費を支えた税制改革について検討した。また1860年から61年の安慶攻防戦を中心に、太平軍、清軍(湘軍)と第三勢力(捻軍や苗沛霖、李昭壽の団

練など)の関係について分析を進めた。

研究の基礎となる档案史料については、大陸で出版された『清政府鎮圧太平天国档案史料』に想像以上の遺漏があり、新史料の発見と整理に多くの時間を割いた。また第三勢力をめぐる史料は『軍機処奏摺録副』捻軍項所収分が多く、太平軍から離反した苗沛霖、李昭壽については空白の部分も多かった。これらは中国大陸の歴史認識のあり方を示しているが、客観的な史料分析なしに冷静な歴史研究はあり得ない。改めてこれらの基礎作業を本国(中国大陸)任せにせず、外国人研究者が担うことの重要性を確認できた。

また太平天国の対外関係については、日本国内に所蔵された英文史料から新たな成果を得ることが出来た。具体的にはボナム一行の随員だったスプラットの手記や太平軍の宗教性をめぐる新たな史料で、太平天国のキリスト教的性格に対する好意的な反応がある一方で、彼らの偶像破壊や虐殺行為に対して「聖書を逸脱している」との批判が存在したことが明らかになった。また当時の反応には「文明化の使命」を強調した内容が見られ、当時の宣教師たちの異文化認識を理解する手がかりを得ることが出来た。

これらの成果は新たな研究成果を生み出す貴重な一歩というべきである。また当年度は太平天国初期史を扱った著書『金田から南京へ』を刊行したが、本研究の成果を補足的に盛り込むことが出来た。

【結論】

以上の研究を通じて、太平天国の長江中流域における活動とその結果もたらされた社会変容については、かなりの部分まで明らかになったと思われる。太平天国はキリスト教宣教師がめざした「文明化の使命」のうち、既存の社会体制(偶像崇拜)に対する厳しい批判を受容し、儒教を中心とする地域社会の秩序を揺るがした。これに対抗して成立した湘軍も地域結合をベースとし、排他的な攻撃性を帯びた点で太平軍と共通する部分が多かった。

だが長江流域で行われた両軍の戦闘は、容赦ない殲滅戦の手法によって死者を数千万人という規模に押し上げた。両者は秩序と規範という近代社会に特徴的な要素を持っていたが、激しい攻撃性によって他者に対する寛容を欠いていた。それは当時の民族関係にも現れており、太平天国が満洲族に対する虐殺を行っただけでなく、清軍内部でも贛州人と漢人官僚の間に深刻な対立が存在した。

湘軍の指導者が作戦遂行の必要から満洲人と妥協的な協力関係を築いたのに対して、太

平天国では忠王李秀成などの例外を除くと、排他的な民族観を克復出来なかった。漢人王朝の復活というスローガンを掲げることで、知識人を広く糾合する戦略に失敗した太平天国は、人材の不足もあって劣勢に追い込まれていったのである。

なお本研究では、太平天国の滅亡につながった第三勢力の離反と外国勢力との関係については、史料整理に時間を要したこともあってなお多くの課題が残された。これらは湘軍に関する今後の研究において、さらに深めていきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

- ① 菊池秀明「太平天国の武昌占領とその影響」、国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』38号、2012年、137～169頁、査読なし。
- ② 菊池秀明「太平天国の湖南における進撃と地域社会」国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』37号、2011年、27～62頁、査読なし。
- ③ 菊池秀明「太平天国の広西北部・湖南南部における活動について」、国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』37号、2011年、1～26頁、査読なし。
- ④ 菊池秀明「太平天国の長沙攻撃について」、慶応義塾大学三田史学会『史学』81-1・2号、2011年、117～150頁、査読なし。
- ⑤ 菊池秀明「太平天国における私的結合と地方武装集団」、歴史学研究会編『歴史学研究』880号、2011年、34～45頁、査読なし。
- ⑥ 菊池秀明「永安州時代の太平天国をめぐる一考察」、国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』36号、2010年、63～90頁、査読なし。
- ⑦ 菊池秀明「英国国立公文書館所蔵の太平天国史料について」、文史哲研究会編『集刊東洋学』102号、2009年、61～82頁、査読あり。
- ⑧ 菊池秀明「金田団営後期の太平天国をめぐる諸問題」、高知大学史学科編『海南史学』47号、2009年、53～78頁、査読なし。
- ⑨ 菊池秀明「広西における上帝会の発展と金田団営」(国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』35号、2009年、37頁～63頁。査読なし。

[学会発表] (計4件)

- ① 菊池秀明「近代中国辺境社会被作為文明的「中国化」——光緒時期広西少数民族地区的開發和地方政府」中央研究院台湾史研究所主催「第四届國際漢学会議」、2012年6月22日、台北、中国語。
- ② 菊池秀明「同治初年中國政治精英的“敬陳管見”」、中国社会科学院近代史研究所・浙江省民国浙江史研究中心主催「“政治精英与近代中国”國際學術研討会」、2012年4月21日、中国杭州、中国語。
- ③ 菊池秀明「洪秀全の挫折和上帝教」、中国・広州市花都区「太平天国与近代中国社会國際學術討論会」、2011年12月27日、中国広州、中国語。
- ④ 菊池秀明「太平天国の客家正統論与中国民族主義」、中国太平天国史研究会主催「紀念太平天国起義160周年學術研究討論会」、2011年8月10日、中国南京、中国語。

[図書] (計5件)

【単著】

- ① 菊池秀明『金田から南京へ』汲古書院、2013年2月、459頁。
- 【共著】
- ② 吉尾寛、小林一美、濱島敦俊、森正夫、菊池秀明ほか20名『民衆反乱と中華世界』汲古書院、2012年、771頁。菊池担当分は「広東凌十八蜂起とその影響について」、第19番目、367-407頁。
 - ③ 瀬川昌久、西澤治彦、塚田誠之、菊池秀明ほか4名『近現代中国における民族認識の人類学』昭和堂、2011年、270頁(菊池担当分は「太平天国の中国ナショナリズムと客家正統論」、第8番目、227頁～252頁)。
 - ④ 川島真、宮嶋博史、柳澤明(他21名)『岩波講座 東アジア近現代通史』1、東アジア世界の近代・19世紀、岩波書店、2010年(菊池担当分は「太平天国における不寛容」(p.300-317)。
 - ⑤ 並木頼壽責任編集、茂木敏夫、菊池秀明編集協力(他8名)『新編原典中国近代思想史』1、開国と社会変容、岩波書店、2010年、351頁。

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

菊池 秀明 (KIKUCHI HIDEAKI)

国際基督教大学・教養学部・教授

研究者番号：20257588

(2) 研究分担者
なし

(3) 連携研究者
なし